



弥生時代後期のムラの分布図(出雲)

左の図は2016年出雲森の博物館特別展図録に掲載されている弥生時代のムラの分布図です。現在の斐伊川は、西谷墳墓群の北方で東に屈曲して宍道湖に注いでいますが、弥生時代には、平野内を西に流れ、『出雲国風土記』に「神門水海」と書かれた潟湖に流入していました。これらの川や潟湖の周辺の微高地には、たくさんの集落遺跡があることが近年の発掘調査からわかってきています。森の博物館では弥生時代の集落跡を9つのグループに分け、仮の「ムラ」名を付けて呼んでいます。西谷3号墓が王墓であれば、王が住んでいたムラがこの9つの中に存在したと推定でき

ますが、いまのところ王宮跡と思われる特殊な遺構や遺物はみつかりません。今後の発掘調査が期待されます。

ここで「ムラ」と呼ばれる地域集団は何人から構成されていたでしょう。血族同士の集団構成だと生物学的にバイタリティーが損なわれる可能性があるので、複数の均衡する血族が存在したかも知れません。また期せずして、他のムラやもっと遠方からの遺伝子も流入していたかも知れません。集団が大きくなるほど集団を調整する必要性が高まり、その能力に長けた人物が現れます。彼は地域集団のリーダーであり、集団の地域が「ムラ」と呼ばれるならば彼は「ムラオサ」です。ムラオサは集団内を調整するとともに、他の集団との交渉も担います。「ムラ」対「ムラ」だけでなく、出雲平野内にある全部の「ムラ」の話合いも開かれたことでしょう。ムラオサ会議の座長は集まるムラオサの最年長者が輪番制で行っていたかも知れません。しかし、それぞれの「ムラ」は、構成員の数や管理する土地の広さや収穫物の質や量、その他いろいろの条件で必ずしも平等であったかは分かりません。ムラオサ会議の座長も、いつしか特定の「ムラ」のムラオサが務めることに変化したことが予想されます。隔絶した墳墓の出現は、古からの柔軟性が失われ、権力が固定化されて、権力の増長が加速化された結果と見ることはできないでしょうか。どこかの国のAB※内閣にもアナロジーが見て取れます。

下の図は、ヤマトの豪族分布図です。上のムラの分布図と同縮尺とするため、グーグルマップ上に各豪族の範囲を示したものです。各豪族の範囲や互いの間隔は上の図と同じくらいです。ヤマトには、東アジアの緊張に危機感を覚えて、他の複数の地域から連合して流入してきた集団もあったかも知れません。しかし、別の一部はそれ以前の時代から存続したムラを、基盤としているのかも知れません。ヤマトの豪族はその氏族名が記録に残りましたが、ヤマト以外の地域では殆どが失われています。律令制度の確立以降は、体制側に従順である方が勢力保持や拡大に有利だったため、多くはヤマトの豪族の傘下に組して、地域固有の言い伝えを軽んじたことが理由のように思います。

出雲のムラでは、ヤマトや他の地域内に複数存在するムラムラと独自に関係を築き、その連携先が強大になることに協力することによって、自身もまた自らの地域内をまとめあげたのかも知れません。

